

若きレッシングの喜劇『ユダヤ人』

——近代ドイツ戯曲の一里塚——

佐藤 研 一

はじめに

やがて二十になろうとするレッシング (1729-81) は、ライプツィヒ大学神学部に籍を置きながら、『若き学者』*Der junge Gelehrte* (1747 作、1754 刊) をはじめ、幾つもの喜劇に手を染めた。しかも、ノイバリン (1697-1760) 率いる劇団とも交流し、『若き学者』は、1748 年、当劇団によって初演されたのである。このような作家活動に牧師の父親は不満をこぼすが、父親宛返信からは、「ドイツのモリエール」¹ たろうとする青春の活気がみてとれる。

さて、その頃の作品の大半は習作とみなせるものの、ベルリンに移った直後の喜劇『ユダヤ人』*Die Juden* (1749 作、1754 刊) は、ひときわ異彩を放つ。当喜劇は、同時代プロイセンを舞台に、高潔なユダヤ人青年を主人公に据える、全 23 場 1 幕ものである。通説では、『ユダヤ人』は、宗教的寛容を説き、『賢者ナータン』*Nathan der Weise* (1779) のいわば露払いとみなされている²。しかし、果たして、そのような習作であると言い切ってよいのであろうか³。

本稿は、『ユダヤ人』が、いかに従来のドイツ戯曲にはみられない、斬新な作風を築いているのか、いかに近代ドイツ戯曲への道標を指し示す、創造的エネルギーにみなぎっているのか、浮き彫りにしようとするものである。その際、まず、十八世紀ドイツの社会や文学における一般的ユダヤ人像を点描して、『ユダヤ人』にみられる現実造形の特徴を読みとる後論に備えることにしよう。この考察を通して、若きレッシングが、近世から近代への転形期を迎えながら、近代ドイツ戯曲を目指す、大きな第一歩を踏み出した点が解き明かされるはずである。

I.

周知の通り、ユダヤ人は、独自の信仰を守りつづけたため、十八世紀中葉に至っても、キリスト教ヨーロッパでは、侮蔑され、敵視され、追放される憂き目に遭っていた。不信心な、金銭欲の塊の賤民とみなされたのである。ドイツの絶対主義的領邦国家が、一部の富裕な金融業者や企業家のユダヤ人を保護したとしても、もっぱらその財力が商工業振興に寄与し、国家にとって有益であったからにはほかならない。断じて、かれらの境遇に同情したためではない⁴。

レッシングの故国ザクセン公国でもまた、選帝侯フリードリヒ・アウグスト一世 (在位 1694-1733) 統治下、ユダヤ人の活動が厳しく制限された。さらに、郷里の片田舎カーメンツの牧師の父親は、厳格なルター派正統主義信奉者であり、息子の前で、反ユダヤの言辞を弄したものと考えてもおかしくはない⁵。それはさておき、カーメンツは、十七世紀以降、東方ユダヤ人が商いのため、ライプツィヒ見本市に向かう際の街道筋に位置していた⁶。少年レッシングは、髭をたくわえた異様な風貌のユダヤ人たち——その多くは無教養であり、評判も芳しくない——に好奇に充ちた目を向けたにちがいない。ライプツィヒ大学時代 (1746-48) には、見本市に集まるユダヤ人とも身近に接したはずである。だが、教養あるユダヤ人たちと交わるには、『ユダヤ人』

が執筆されるベルリン時代（1748-51, 1752-55）を待たねばならない。

ベルリンでは、フリードリヒ大王（在位 1740-86）が、反ユダヤ人の立場ながら、あくまでも経済的観点より、少数のユダヤ人にのみ居住を許した。1750年の人口約 100,000 人中、ユダヤ人はわずか 2,188 人であった。当地のユダヤ人に対する禁止事項として、つぎの四点が挙げられる。すなわち、一、キリスト教徒との婚姻、二、家族や事業内のキリスト教徒雇用、三、土地所有、四、職業選択の自由である⁷。この禁令が、喜劇『ユダヤ人』のなかで重要な意味をもつことを、あらかじめ指摘しておこう。

このような訳であるから、十八世紀ドイツ戯曲に登場するユダヤ人が、もっぱら悪徳を体現する戯画として観客の嘲笑の的となっていたとしても、異とするに足りない。レッシングの『ユダヤ人』を以って、ドイツ戯曲史上、高潔なユダヤ人像の嚆矢とするのである⁸。もっとも、当喜劇刊行以降も、1754年から1778年まで、ユダヤ人登場のドイツ戯曲は20作を数えるが、その大半が滑稽な老人や従僕のユダヤ人を描く⁹。たとえば、J. M. R. レンツ（1751-92）の喜劇『軍人たち』*Die Soldaten*（1775）も、イディッシュ語とおぼしき台詞を話す、臆病な守銭奴の初老ユダヤ人が下卑た笑いを誘い出す（第3幕第1場）。

なお、小説に目を転じれば、当代ドイツ随一の人気作家ゲラート（1715-69）の『スウェーデンの伯爵夫人 G*** の生涯』*Leben der Schwedischen Gräfin G****（1747/48）には、ポーランドの善良なユダヤ人が登場する¹⁰。これは、ドイツ文学史上、最初の「高貴なユダヤ人」である。しかし、ゲラートの物語詩『インクルとヤリコ』*Inkle und Yariko*（1746）の主人公である南アメリカ先住民の娘ヤリコ同様、このユダヤ人もまた、一世を風靡した、「感傷主義」に彩られる異国趣味のトポス「高貴な野蛮人」以上のものではない。ユダヤ人を社会的平等の文脈から捉える視点が抜け落ちているからである。つまり、後述する通り、社会的・政治的次元におけるユダヤ人の解放まで射程に収める『ユダヤ人』の主人公とは、異質なのである¹¹。

II.

『ユダヤ人』の大筋はつぎの通りである。若き富裕な教養ある旅人が、プロイセンにて、兇賊に襲われた男爵を救い、お礼に館へ招かれる。男爵や執事は、賊はユダヤ人であると言い張って、ユダヤ人を誹謗する。しかし旅人によって、その追い剥ぎの正体は、男爵の側近のふたり、執事と領地内村長であることが判明。男爵は、旅人に感謝した挙句、財産のみならず、令嬢まで花嫁として差し出そうとする。しかし旅人は、自分が同化ユダヤ人であることを告げ、申し出を固辞して、幕が降りる。

つぎは、第一場冒頭における執事クルムと村長シュティヒの掛け合いである。

マルティーン・クルム 白状しようじゃねえか、おれたちゃあ、ふたりとも、間抜け野郎だつてな。奴〔男爵〕なんざ、目じゃなかった。ばらすことだってできたんだぜ。

ミヒェル・シュティヒ てめえ、どうかしてるな。あれ以上、どうしろっていうんだ。うまいこと〔ユダヤ人の髭をつけて〕変装をしなかったか？ 御者だって、こっちのいうなりじゃなかったか？ 運が傾いたのは、おれたちのせいじゃねえだろう？ 何百回も言ったはずだぞ、強い運、こいつが味方についてくれなきゃ、盗人家業もお手上げよ。

マルティーン・クルム そうかかもしれねえ。だがよ、よくよく考えてみりゃあ、お蔭で二、三日はお縄を頂戴しないですんだってことさな。

ミヒェル・シュティヒ　なんでえ、お縄がなんだよ。盗人のどいつもこいつも、首を絞められてみる、絞首台はもっと立て込むぜ。それが、二マイルも歩けば絞首台にお目にかかるが、たいていはがら空きさ。どうやら裁判長のお歴々、礼節を尊びなさって、絞首台をお払い箱になさるつもりじゃねえのか。あれが何の役に立つ？　せいぜい、おれたち盗人がさしかかるたびに、ちょいと薄目を開けるぐらいなもんさな。

マルティーン・クルム　ばかな！　おれは、そんなこともしやしねえ。親爺だって爺さんだって、吊るされたんだぜ。おれだって、それ以上ましなことを望むもんか。親を恥だとは思っちゃいねえもの。¹²

ふたりの名前をみると、「気の触れた」シュティヒ (Stich) にせよ、「邪悪な」クルム (Krumm) にせよ、それぞれが人物をカリカチュア的に類型化して (Sprechender Name)、当代流行の「ザクセン喜劇」に則っていることが分かる。盗賊シュティヒは、こともあろうに男爵領の村長であり、当領内裁判権を握っている。クルムの方は、親代々の盗人である。それにもかかわらず、両者とも、男爵から「領内一番の正直者」(485) とか「心より信頼できる律義者」(479) とか呼ばれて、その右腕であるというのだから (第6場、第18場)、呆れる。

それはさておき、この粗野な言葉のやりとりに耳を傾けているだけで、絞首台が立ち並ぶ、当代プロイセンの寒々とした野原の情景が臉の裏に浮かんできそうである。グートケは、このような具体的な時と所を礎にした写実性に注目して、当代喜劇の観念的世界とは対蹠的である、との確な指摘をしている¹³。現世的な社会風俗を、赤裸々に写し出すリアリスティックな台詞は、ゲラート流「感傷主義」の台頭の折、画期的といえるのである。

つづく第2場の旅人とクルムの台詞のやりとりは、以下の通りとなる。

旅人 [盗賊は] ユダヤ人だったと、ご主人は言い張っておられる。髭をつけていたのは、たしかだ。だが、言葉づかいは、正真正銘、ここら辺の百姓言葉。変装をしていたとみだが、黄昏時であれば、さぞかし好都合であったろうな。そもそもこの国では、ごくわずかのユダヤ人しか居住を許されていない。それなのに、路上で物騒な真似をしでかすなど、信じられん。

マルティーン・クルム　そうですともさ！　ユダヤ人なのは間違いありませんや。旦那様は、あの罰当たりのならず者をご存知じゃないとみえる。奴らときたら、一人残らず、詐欺師、盗人、追い剥ぎでさ。だから、神様から呪われた民族なんで。あっしが、王様になれるもんなら、奴らのただの一人だって生かしちゃおきませんぜ。ああ！　神様、こ奴らから、誠実なキリスト教徒皆をお守りくだせえ！　神様ご自身が奴らを憎んでいなきゃ、どうして、先頃のプレスラウ [現ヴロツワフ] の戦禍 [オーストリア継承戦争 (1740-48)] で、キリスト教徒の倍の人数が死ぬもんですかい。お坊様のごりっぱなお説教を伺って、そう思い当たったんで。ユダヤ人め、まるでそいつを耳に入れたとでもいうように、あっしどものご主人様に仕返しを食らわせるなんぞ、許せねえ。ああ！　旦那様、この世で幸福に恵まれたいとお思いなら、ペストよりも連中にお気をつけなさいましよ。(452f.)

クルムは、ユダヤ人に対する憎悪むきだしの台詞を吐く。19世紀後半以降の反ユダヤ主義を先取りするような狂信的な暴力的言葉には、驚かされよう。しかも、これは教会から鼓吹されている、という事実まで明かされる。こうして、ルター派領邦教会を背後に蔓延する、プロイセン

のユダヤ人偏見の現実を、レッシングは暴き出してみせる。

さて、クルムはつづけていう。

マルティーン・クルム 旦那様、たとえば、見本市を訪ねたとき——そうであらう！ 見本市のことを考えただけで、できれば忌々しいユダヤ人ひとり残らずに、いっぺんに毒を盛りたくなるんで。奴らときたら、人混みにまぎれ込み、一人目からハンカチ、二人目から嗅ぎ煙草入れ、三人目から時計をくすねる。あっしにも、それ以上は分からぬ手際よき。盗みのすばしっこさといったら、みあげたもんで。パイプオルガン教師の手捌きもかなわんほどであらう。旦那様、たとえば、奴らはまず、誰かに近づく、今、あっしがあなた様にこうするように——

旅人 おい、少しは礼儀をわきましろ！——

マルティーン・クルム いや！ もうしばしお聞きを。奴らがこう立つと——よろしいですか——稲妻のように、時計入れポケットに手を伸ばす。（かれは、時計ではなく、上着のポケットに手を伸ばし、嗅ぎ煙草入れを抜き取る。）きわめて巧妙な手口なので、手先がほんとうに目指す方角とは別の方角へ向かう、とこちらは思い込む始末。嗅ぎ煙草入れの話をするときは、実は時計を、時計の話のときは、実は嗅ぎ煙草入れを盗ろうと考えているので。（巧みに時計をとろうとするが、取り押さえられる。）

旅人 おいおい！ 落ちつけ！ そちの手をどこへ伸ばしておる？

マルティーン・クルム ごらんのように、旦那様、どうやらあっしは不器用な盗人のようでして。ユダヤ人なら、とっくに上等な時計をものにしておりませう。——（453f.）

クルムは、「ユダヤ人」の盗人ぶりを演じて、巧妙な手口で旅人の銀製「嗅ぎ煙草入れ」を盗む。呪いの対象の「ユダヤ人」がみずからに憑依したとでもいうような、なんとも滑稽な場面である。これによって、ユダヤ人を盗人呼ばわりするキリスト教徒自身が、実は盗人にほかならないことが、観客の前で実演される。この台詞を読むだけで、雑踏でごった返す見本市が彷彿として眼前に現れ、呼び声や歓声や嬌声が乱れとぶ様が耳に届き、群衆の熱気がじかに伝わってきそうである。世情に通じて、埃臭い市井風俗の生態を切り取る、若きレッシングの筆致は、なんとあざやかであることか。喜劇『ミンナ・フォン・バルムヘルム』*Minna von Barnhelm* (1763) や悲劇『エミーリア・ガロッチェ』*Emilia Galotti* (1772)、あるいはレンツの喜劇にみられる冷徹で、生々しい現実造形の萌芽が読みとれよう。

なお、「嗅ぎ煙草入れ」は、恋の小道具として、クルムから男爵の小間使いリゼッテへ、リゼッテから旅人の従僕クリストフへと持ち主が変わることで、劇を動かすのに一役を買っている。民衆劇の常套手段である。レッシングがゴットシェート（1700-66）流の道学先生ぶりを嫌って、あえて民衆劇の伝統に連なろうとする姿勢がおもしろい¹⁴。なお、コメディヤ・デラルテに遡れる笑いの伝統は、恋の駆け引きをめぐる口八丁手八丁のリゼッテや、がさつなクリストフの言動からも、よくみてとれる¹⁵。

III.

第6場を迎えれば、男爵は、シュティヒの言葉を信用して、追い剥ぎをユダヤ人と決めつけると、旅人の前で、ユダヤ人に悪口雑言を浴びせかける。

金儲けが第一と考えるような民族は、儲けさえすればいい。その手段が正当か不正か、策を弄すか、力づくか、そんなことは、どうでもいい。——奴らときたら、商いに、いや有体に申せば、詐欺に向いているのですな。(460)

そして、男爵は言葉を継いでいう。「奴らの顔つきをみるだけで、嫌悪を覚えませんかな？ 腹黒いこと、良心のかけらもないこと、利己心、欺瞞、偽誓。この点が、あの眼差しから、はっきりと読みとれる」と。そのうえで、旅人がユダヤ人なのを知らずに言っている。「あなたのような誠実で、寛容で、人好きのする顔つきを拝見したことはない」(461)と。これにより、いかに直前の台詞が根拠のない批評であるかが暴露され、男爵が滑稽化される仕組みとなっている。そもそも偏見とは非論理的なものであるのだが。それに対して、旅人は、遠慮がちなが、切実な思いで、常識的な私見を述べて、この場は終わる。

白状すれば、すべての民族について一般的判断を下すことなど、わたくしにはできません。——不躰なことを申しますが、お怒りになりませんように。——わたくしの考えでは、どんな国民でも、善人もいれば、悪人もいます。ユダヤ人もまた——(461)

さて、この後ほどなく、旅人の前で、クルムがポケットから変装用付け髭を落としたことがきっかけとなって、男爵の右腕のふたりこそが、盗人であることが判明する。それを踏まえて、第22場の冒頭、男爵は令嬢に言って聞かせる。

わたしの恩人〔旅人〕に、お前を花嫁として迎え、財産も受け取っていただくよう、お願いしてごらん。わたしが感謝して捧げる一番尊いものといったら、わたしが、あの方同様、愛情を注ぐお前を措いてないではないか？(485)

しかも、旅人に向かって、「感謝するという、かけがいのない楽しみを味あわせてください」とつけ加えるのを忘れない。惜しげもなく令嬢や財産を譲って、私心のない愛を得々と披露する点は、いかにもゲラート流の「お涙頂戴喜劇」¹⁶の紋切型の主人公を思わせよう。感傷的善人であればこそ、執事や村長が人殺しもやりかねない兇賊であるのを見抜けず、また、たやすくユダヤ人偏見の虜ともなるのである。

さて、この段に及んで、旅人は、ついに告白せざるをえない。「わたしは、ユダヤ人なのです」と。

男爵 ユダヤ人ですと？ なんと不運なめぐりあわせよ！

クリストフ〔旅人の従僕〕 ユダヤ人だって？

リゼッテ〔男爵の小間使い〕 ユダヤ人ですって？

令嬢 あら、それがどうしたっていうの？ わたくしをお嫁に迎えるのに、なんの差し障りがあるのかしら。

リゼッテ しっ、お黙りください、お嬢様。あとで、わけをお話ししますから。

男爵 謝意を表そうという折も折り、こうして、神様¹⁷が邪魔をなさることもあろうとは。(486)

主人公がユダヤ人と分かるやいなや、男爵から従僕まで皆、驚愕に襲われる。ただひとり令嬢

だけは、「お転婆」や「まるで生まれたままの自然児」(486)¹⁸と呼ばれるだけあって、世間の偏見に染まっていない。ともあれ、観客自身もまた、仰天して目を見張る場面であろう。

旅人が、たとい令嬢を憎からず思ったにせよ、キリスト教徒との結婚は、法律上許されはしない。そこで、男爵は、不意打ちにうろたえながら、「お涙頂戴喜劇」の登場人物さながら、感謝の印として「全財産」を贈与するとまで言い出す。「恩知らずの金持ちよりも、恩返しの気持ちで一杯の貧乏人でいたい」と。だが旅人は、この申し出も拒む。男爵によれば、しょせんユダヤ人は「儲けばかり考える」卑劣漢のはずなのだが(第6場)。

旅人 (前略) どうしても報いてくださりたいというのなら、どうか今後は、わが民族に対して、もう少し穏やかに接していただき、妙な偏見なぞお持ちにならないよう、お願いいたします。わが宗教を恥じるあまり、素性を隠していたのではありません。ちがいます。あなたは、わたくしに好意を示しておいでなのに、わが民族には反感を抱いていらっしゃるのが、分かっておりましたので。相手がどなたであれ、人間と人間を結ぶ友情こそ、わたくしには、いつだって大切でした。

男爵 わが態度に恥じ入るばかりだ。

クリストフ これで、ようやく、あっしも驚きから我に帰ったぜ。なに? あんたがユダヤ人だって、それで、よくも真面目なキリスト教徒を雇おうとしたもんさ。あっしの方が、お供を申しつけたかったぜ¹⁹。聖書に倣うなら、それが筋ってもんさ。(中略)——お供をつづけるとは、もう思わんでください。それどころか、訴えたくもならあ。

旅人 お前が、ほかのキリスト教徒の民衆たちよりも、ものを考えるなどとは、思ってもおらん。(中略) だがな、お前の働きにはずいぶん助けられもした。しかも先ほどは、あらぬ[嗅ぎ煙草入れを盗んだ]疑いをお前にかけてしまった。だから、その報いに、リゼッテからの贈り物をまた受け取るがいい。俸給もやろうとも。さあ、行きたいところへ行け。(嗅ぎ煙草入れを与える。)

クリストフ なんてこった! ユダヤ人って、寛容な方々だとは[どうやらユダヤ人じゃないユダヤ人もいるってわけか]²⁰。あなた様は、ごりっぱな方でいらっしゃいます。よし、あなた様のところから離れませんぜ! あっしのような口を利いたら、キリスト教徒じゃ、銀製煙草入れなぞ、くれるもんですかい! これは、抜かったな。

男爵 あなたのやることなすこと、一切に感銘しましたぞ。さあ、あの罪人ら[シュティヒとクルム]がきちんと収監されるようにしよう。ああ、ユダヤ人が皆、あなたと似た方々ばかりならば、どんなに尊敬すべき人たちだろう!

旅人 そして、キリスト教徒が皆、あなたのような性格の方々ならば、どんなに愛すべき人たちでしょうか!

(男爵、令嬢および旅人退場)(486ff.)

「儲けばかり考える」のは、むしろキリスト教徒クリストフの方である。かれは、銀製「嗅ぎ煙草入れ」が手に入ると、前言を翻し、悪びれもせず、旅人の従僕という元の鞘に収まる。

ところで、「旅人」を理想的キリスト教徒と思い込んでいた男爵は、この段に及び、思わず、また情緒的な台詞を吐露する。「ああ、ユダヤ人が皆、あなたと似た方々ばかりならば、どんなに尊敬すべき人たちだろう!」と。この言辞は、裏からいえば、「ユダヤ人の皆が、旅人に似て

いるわけではないので、ユダヤ人は尊敬できない」という「一般的判断」にほかならない。つまり、男爵は、「ユダヤ人であれキリスト教徒であれ、善人もいれば悪人もいる」（第6場）という良識を、今なお受け入れることができない。「どうやらユダヤ人じゃないユダヤ人がいるってわけか」という庶民のキリストフ同様、男爵もまた、せいぜい旅人を例外的存在とみなすだけであり、ユダヤ人自体は許容することができないのである。

旅人の最後の台詞、「キリスト教徒が皆、あなたのような性格の方々ばかりならば、どんなに愛すべき人たちでしょうか！」は、男爵の台詞と対をなすため、一見、それに和する返答のようにみえるかもしれない。しかし、これは字句通りにとるわけにはゆくまい。冒頭から執事や村長の悪党ぶりがあらわに示されたように、そもそも「キリスト教徒皆」が「男爵のような性格」であるはずもなく、旅人は、その道理を重々弁えている。それにもかかわらず、あえてかれは「一般的判断」を織り込んだ台詞を吐くわけである。なぜか。これは、男爵の口から、「一般的判断」の台詞を再度耳にして、やり場のない憤懣を抱き、皮肉を投げ返さざるをえないからにほかなるまい²¹。もっとも、その辛らつな毒矢は、男爵の胸に届くこともなく、ここで対話は打ち切られてしまう。これにつづく、短いエピローグでは、リゼッテとキリストフが気の利いた台詞を交わし、腕を組んで退場する。

こうして、『ユダヤ人』は、ドイツの社会の上から下まで——絶対主義国家とルター派領邦教会に支えられ——はびこるユダヤ人偏見の病巣を、容赦なく剔抉する。ここからは、「キリスト教徒とユダヤ人婚姻禁止」や「ユダヤ人の家族や事業内のキリスト教徒雇用禁止」というプロイセンの国法に対する異議、換言すれば、ユダヤ人解放を願う声が、はっきりと聞き取れる²²。すぐれて手厳しい批評的目である。しかし奇妙なことに、若きレッシングは、この状況を宙吊りのままにして、いかなる解決も示すことなく喜劇の幕を下ろす。

第1場では、プロイセンの寒々とした野に絞首台が立ち並ぶ情景を描き出し、第2場では、見本市という喧噪の市井を鋭く切り取るとするならば、大詰めでは——喜劇らしい華やいだ結婚のハッピーエンドを示すどころか——ユダヤ人とドイツ人の埋めようもない人間的溝を、まさしく当代プロイセンの現実そのまま、容赦なく暴露して終わる。そのうえ、粗野な「百姓言葉」から洗練された教養人の言葉まで、多彩な言葉遣いを披露する。そして、徹頭徹尾、雑多な世態と切り結びながらも、理念的解決をもたらすことはしない。これが、なにもかも見通す明敏な若きレッシングによる現実造形の実相なのである。

ところで、観客は、主人公がユダヤ人なのがあったとたん、もはや主人公に一体感を覚え、その高邁な態度に涙することはあるまい。また、もうひとりの共感の対象とおぼしき男爵の方は、主人公からユダヤ人偏見の塊として糾弾される。そこで、その「キリスト教徒が皆、あなたのような性格の方々ばかりならば、どんなに愛すべき人たちでしょうか！」という皮肉の矢は、ひっきょう、観客自身に突き刺さることとなるはずである。こうして、観客は、喜劇の期待を裏切られ、苦々しい思いを嘔みしめ、劇場を後にする²³。

かような「未完の結末」を迎えるのは、当代ドイツ喜劇にとって斬新であった。これは、『エミーリア・ガロッチィ』に引き継がれてゆくことにもなる²⁴。いずれにせよ、解決困難なユダヤ人偏見問題について、これとは別の終わり方もあるのではないかと考えさせたり、観客ひとりひとりに自省を促したりする、きっかけともなりえよう。ところで、レッシングの次世代の劇作家、レンツの喜劇の終幕は、ハッピーエンドの装いをまとうものの、実は、痛烈な反語的效果を計算に入れて、挑発的である。これまた、「未完の結末」なのである²⁵。したがって、『ユダヤ人』

の大詰めは、このような近代的な戯曲を先取りしているとみなしてもよい。

ここで、若きレッシングの喜劇を一瞥すれば、「諷刺喜劇」の伝統に立って、『若き学者』から『女嫌い』*Der Misogyn* (1748 作、1755 刊)、『オールドミス』*Die alte Jungfer* (1748)、『自由思想家』*Der Freygeist* (1749 作、1755 刊) に至るまで、モリエール同様、題目に諷刺的的が明示される。この伝でゆけば、『ユダヤ人』もまた、ユダヤ人が諷刺の対象になるところであるが、実際は、それとは正反対に、ユダヤ人に対して差別的言動をとる「誠実なキリスト教徒」のドイツ人観客が、愚弄の矢面に立たされる。『ユダヤ人』は、表題自体からして、観客の期待を裏切る仕掛けとなつて、「ザクセン喜劇」の枠組を、いわば食い破るのである²⁶。

IV.

最後に、『ユダヤ人』の受容について一言触れたい。当喜劇は、1754 年、『著作集』第 2 巻第 4 部に、喜劇『若き学者』とともに収められて、世に送り出された。第 3 部・第 4 部の前書では、『ユダヤ人』の「冒険的企画」について、つぎのようにいう。

この作品は、ある民族が呻吟せざるをえない屈辱的抑圧をつぶさに観察した結果、生まれたものである。思うに、かれらは、キリスト教徒も敬意を払わざるをえない人々なのである。わたしは、かつてユダヤ民族から英雄や預言者が輩出したことを思い浮かべた。しかし、今なお、この民族にも誠実な男がいるのかどうか、疑う者があるというのか。(中略) そこで、思いついたのである。ユダヤ人が、これまで誰も予想しないような美德を發揮したら、どんな芝居の効果があるだろうか、と。²⁷

ここでは、レッシングが、あくまでもユダヤ人の抑圧された状況の実見に基づいて、『ユダヤ人』の描写を施したことが明記される。当喜劇は、断じて観念の戯れではない、書齋の妄想ではない、というのである²⁸。ところが、同年、ゲッティンゲン大学哲学・東洋学教授の J. D. ミヒャエリス (1717-91) は、高潔なユダヤ人など、絵空事にすぎない、と酷評する。

この名前不詳の旅人は、いかなる点においても、非の打ちどころなく善良で、高潔である (中略)。しかし実は、この民族 [ユダヤ人] は、キリスト教徒たちから邪悪なふるまいを受けたせいで、かれらに激しい敵意、少なくとも冷淡さを感じたとしてもおかしくはない。だから、これほどの高貴な心情を、いわばおのずから胸中に育てるなど、不可能ではないにせよ、あまりにも真実性に欠けるのである。(中略) この民族の大部分は、他の生活手段と比べて、詐欺の機会や誘惑に陥りがちな商いにより、生計を立てねばならない。したがって、世間並みの誠実さすら、めったに見出すことはできないのである。²⁹

つまり、当代の高名な新教神学者は、「奴らときたら、商いに、いや有体に申せば、詐欺に向いているのですな」(第 6 場) と述べた劇中の男爵と同一の主張をくりかえす³⁰。これについて、現代のレッシング研究者バルナーは、頂門の一針ともいふべき批評を下している。すなわち、『ユダヤ人』のキリスト教徒批判こそ、ミヒャエリスの逆鱗に触れた、と。したがって、「真実性欠如」という批判は装いにすぎず、その本来の意図は、キリスト教徒批判反批判にほかならない、というのである³¹。当代のすぐれた知性にもユダヤ人憎悪が浸透していることが窺い知れよう。むろ

ん反骨的レッシングが、黙っているはずもない。「喜劇『ユダヤ人』について」*Über das Lustspiel Die Juden* (1754) のなかで、つぎのようにいう。

ともあれ、社会状況が変わって、ユダヤ人が商いをする必要がなくなれば、真実性欠如とはいえなくなるのではないか？（中略）もしも富や貴重な経験や啓蒙された悟性が、ユダヤ人にとっては、いかなる効用も果たさない、と言い張るならば、これこそ、わたしの喜劇が正そうとした偏見にほかならない。これは、高慢と憎悪から生まれた偏見、ユダヤ人を野蛮人どころか、事実上、人間以下に貶める偏見である。(491)

これは、即座にレッシングが投げつけた反批判である。社会的・職業的規制の法律が廃止されさえすれば、ユダヤ人は、もはや卑しい「商い」により生計を立てずにすむ。そのとき、「旅人」同様、かれらは富を得、読書をし、啓蒙されて、ひっきょう、寛容と誠実を体現することとなる³²。このとき、高潔なユダヤ人も「絵空事」ではなくなる、という論法である³³。

ところで、『ユダヤ人』は、1766年、ニュルンベルクで初演されて以来、1788年まで20年あまりの間、上演回数は64回にもものぼる³⁴。だが、だからといって、観客が皆、当喜劇に感銘したわけではなさそうである。たとえば、少々時代が下るが、1806年、ユダヤ人向けの最初のドイツ語雑誌には、以下の劇評が掲載された。

故レッシング氏は、執事〔クルム〕によるユダヤ人蔑視の粗野な言葉を、札付きの悪党に言わせているのである。だが、その点を、キリスト教徒観客の多くは理解せず、心から笑って、拍手喝采をした。——それでは、ユダヤ人観客は？ それがなんと——この非人間的劇団が演じる限り、二度と劇場なぞ行くものか、と——心に固く決めたのである。——³⁵

ドイツ人観客が、ユダヤ人を敵視するクルムの台詞に喝采するばかりか、ユダヤ人観客もまた、クルムの悪党ぶりを分かっていない。この喜劇は無理解に晒されていたのである。

おわりに

若きレッシングの喜劇『ユダヤ人』は、人物像が紋切型から脱皮し得なかつたり、ときに台詞が説明調で冗長であったり、未熟な面も目につくものの、喜劇の伝統を巧みに駆使する点は、括目に値しよう。だが、なによりも、ユダヤ人排斥という難題を前にして、「書斎の妄想」に耽るどころか、もっぱらプロイセンの猥雑な世相を——絞首台の立ち並ぶ荒涼とした風景や雑踏にごめく市井の人々を活写するレッシングの筆致は犀利であり、ユダヤ人偏見に対する乾いた批評的笑も斬新である。

しかも最後は、ユダヤ人とドイツ人の間的人間的溝が埋まることなく、「誠実なキリスト教徒」、ユダヤ人嫌いの観客自身が嘲弄的となって、罵倒され、幕が下りる。すぐれて現代的な挑発的戯曲である。当代ドイツ随一の流行劇作家コツェブーによる「大衆迎合的」な世界とは対蹠的である、といえよう³⁶。

このように醒めた目で人間社会の実相に肉薄し、市井風俗百態を描かんとする『ユダヤ人』からは、自分の時代の戯曲を創造しようとして、もがき苦しむ若き作家のエネルギーがみてとれる³⁷。つまり、若きレッシングの『ユダヤ人』は、『賢者ナータン』の前段階を示す「習作」に

とどまるようなものではない³⁸。それどころか、『エミーリア・ガロッティ』やレンツの喜劇——汗臭かったり、白粉に憂き身をやつしたりする、生身の人間を描き出す喜劇の登場まで、もう少しだけ待てばよい、そう、思わせるものが、この喜劇にはある。若きレッシングは、近世の闇を疾駆しながら、近代の扉を叩き、新しいドイツ戯曲創作への第一歩を踏み出したといっても、けっして的是ずれの評言にはならないはずである。

注

- 1 Lessing an Johann Gottfried Lessing. 28. April 1749. In: Gotthold Ephraim Lessing: *Werke und Briefe in 12 Bänden. Band 11/1: Briefe von und an Lessing 1743-1770*. Hrsg. von Helmuth Kiesel unter Mitwirkung von Georg Braungart und Klaus Fischer. Frankfurt a. M.: Deutscher Klassiker Verlag, 1987, S. 24.
- 2 Vgl. Wilfried Barner: Lessings *Die Juden* im Zusammenhang seines Frühwerks In: *Humanität und Dialog: Lessing und Mendelssohn in neuer Sicht: Beiträge zum Internationalen Lessing-Mendelssohn-Symposium anlässlich des 250. Geburtstages von Lessing und Mendelssohn, veranstaltet im November 1979 in Los Angeles, Kalifornien*. Hrsg. von Ehrhard Bahr, Edward P. Harris und Laurence G. Lyon. Detroit: Wayne State University Press, 1982, S. 189f.
- 3 『ユダヤ人』を再評価するものとして、つぎの論考がある。Barner, Lessings *Die Juden* (Anm. 2), S. 189-209.; ders.: Vorurteil, Empire, Rettung. Der junge Lessing und die Juden. In: *Juden und Judentum in der Literatur*. Hrsg. v. A. Strauss und Christhard Hoffmann. München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1985, S. 52-77.; Guthke, Karl: Aufklärung in Preussen. Lessings Problemkomödie *Die Juden*. In: ders.: *Die Erkundungen. Essays zur Literatur*. Bern, Frankfurt a.M.: Lang, 1983, S. 59-71.; ders.: „Unter allen Nationen gute und bösen Seelen”. Lessings *Die Juden*. In: ders.: *Die Erfindung der Welt. Globalität und Grenzen in der Kulturgeschichte der Literatur*. Tübingen: Francke, 2005.
- 4 Vgl. Klaus L. Berghahn: *Grenzen der Toleranz. Juden und Christen im Zeitalter der Aufklärung*. Köln/Weimar/Wien: Böhlau, 2000, S. 23-45.
- 5 Vgl. Barner, Vorurteil, Empire, Rettung (Anm. 3), S. 59-62.
- 6 Ebd., S. 62.
- 7 Hugh B. Nisbet: *Lessing. Eine Biographie*. Aus dem Englischen übersetzt von Karl S. Guthke. München: Beck, 2008, S. 94. なお、同時代のイギリスおよびオランダが、ユダヤ人の土地所有権や職業選択自由を認めた点を、レッシングは高く評価した。Lessing, *Werke und Briefe* (Anm. 1), *Band 2: Frühe Schriften. Werke 1751-1753*. Hrsg. von Jürgen Stenzel. 1989, S. 523f. Vgl. Nisbet, *Lessing* (Anm. 7), S. 95.
- 8 Barner, Vorurteil, Empire, Rettung (Anm. 3), S. 58. Vgl. Guthke, Aufklärung in Preussen (Anm. 3), S. 62f.
- 9 Och, Gunnar: Lessings Lustspiel „Die Juden” im 18. Jahrhundert. Rezeption und Reproduktion. In: *Theatralia Judaica*. Hrsg. von Hans-Peter Bayerdörfer. Tübingen: Niemeyer, 1992, S. 51-58.
- 10 Christian Fürchtegott Gellert: *Gesammelte Schriften. Kritische, kommentierte Ausgabe*. Hrsg. von Bernd Witte. Bd. IV. Zweyter Teil. Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1989, S. 51ff.
- 11 Vgl. Jürgen Stenzel: Idealisierung und Vorurteil. Zur Figur des „edlen Juden” in der deutschen Literatur des 18. Jahrhunderts. In: *Juden in der deutschen Literatur*. Hrsg. von Stéphane Mosès und Albrecht Schöne. Frankfurt: Suhrkamp, 1986, S. 118f.
- 12 Lessing, *Werke und Briefe* (Anm. 1), *Band 1: Frühe Lustspiele. Werke 1743-1750*. Hrsg. von Jürgen Stenzel. 1989, S. 449. 以下、本稿において、同書から引用する場合は、本文中に頁数のみを記す。なお、同書は、以下の初版に拠っている。Die *Juden. Ein Lustspiel in einem Aufzug. Verfertigt im Jahre 1749*. In: *G.E. Lessings Schriften*, Vierter Teil, Berlin 1754, S. 225-312.
- 13 Guthke, „Unter allen Nationen gute und bösen Seelen” (Anm. 3), S. 104.
- 14 Vgl. Nisbet, *Lessing* (Anm. 7), S. 67-69.
- 15 Vgl. Walter Hinck: *Das deutsche Lustspiel des 17. und 18. Jahrhunderts und die italienische Komödie: commedia dell'arte und théâtre italien*. Stuttgart: Metzler, 1965, S. 281-283.
- 16 「お涙頂戴喜劇」は、ゴットシェート流の「諷刺喜劇」同様、「ザクセン喜劇」のひとつ。人間関係の縄れが、

- 無私の愛や寛容などの市民的美德によって解決し、観客も泣きぬれて終わる。ドイツにおける創始者はゲラートである。佐藤研一『劇作家 J. M. R. レンツの研究』（未来社、2002 年）、17-18 頁、55-57 頁および 96-97 頁参照。なお、『ユダヤ人』には、「寛容 (Großmut)」（387, 390, 411, 412）、「博愛 (Menschenliebe)」（378, 411）、「誠実な (ehrlich)」（378, 403, 411）のように、「お涙頂戴喜劇」を特徴づける言葉が頻出する。しかも、旅人もまた、繊細な心の持ち主である。そのかぎりでは、かれも「お涙頂戴喜劇」の系譜上の人物といえよう。Vgl. Guthke, *Aufklärung in Preussen* (Anm. 3), S. 61f.; Nisbet, *Lessing* (Anm. 7), S. 98.
- 17 神の恩寵により発布される絶対主義国家の法、すなわち「キリスト教徒とユダヤ人婚姻の禁止」。本稿 I を参照。Vgl. Guthke, *Aufklärung in Preussen* (Anm. 3), S. 63.
- 18 旅人も令嬢を褒めていう。「愛らしい無邪気さや、作作的ではない機知に溢れるお話しぶり」（458）と。なお、バルナーによれば、令嬢は、『エミーリア・ガロツティ』のオルシーナ伯爵夫人同様、レッシングの描く「真実」を語る女性のひとりである。Barner, *Lessings Die Juden* (Anm. 2), S. 203.
- 19 「ユダヤ人の家族や事業におけるキリスト教徒雇用禁止」に拠る。本稿 I を参照。
- 20 改訂版 (*Lustspiele von Gotthold Ephraim Lessing. Erster Teil, Berlin 1767.*) の当該部分の台詞である。これに以下がつづく。「あなた様は、ごりっばな方でいらっしゃいます。よし、あなた様のところから離れませんぜ！キリスト教徒なら、あっしの肋骨めがけてひと蹴りするとところさ。嗅ぎ煙草入れなぞ、くれるもんですかい！」(1165)
- 21 Vgl. Guthke, *Aufklärung in Preussen* (Anm. 3), S. 66-70.; Stenzel, *Idealisierung und Vorurteil* (Anm. 11), S. 121.
- 22 Vgl. Guthke, *Aufklärung in Preussen* (Anm. 3), S. 63f.; Nisbet, *Lessing* (Anm. 7), S. 95. このように抑圧的権威を弾劾し、犠牲者を擁護するという立場は、『カルダーヌスの弁護』*Die Rettung des Hier. Cardanus* (1754) にみる「弁護」(Rettung) の姿勢に通じる。Barner, *Lessings Die Juden* (Anm. 2), S. 195 und 197. なお、全 3 巻 6 部の『著作集』*G.E. Lessings Schriften* (1753-55) の第 2 巻第 3 部（注 12 参照）には、『カルダーヌスの弁護』*Die Rettung des Hier. Cardanus* ほかに 3 篇の「弁護」が、第 4 部には『ユダヤ人』が収録されている（本稿 IV 参照）。『カルダーヌスの弁護』については、つぎを参照。笠原賢介「レッシングと非ヨーロッパ世界——『カルダーヌス弁護』におけるイスラームをめぐる」『東北ドイツ文学研究』（日本独文学会東北支部編）第 52 号（2009 年）、167-185.
- 23 Vgl. Barner, *Lessings Die Juden* (Anm. 2), S. 201-205.; Stenzel: *Idealisierung und Vorurteil* (Anm. 11), S. 120f.; Nisbet, *Lessing* (Anm. 7), S. 98f.
- 24 これについては、「みずから考える (selbst denken)」（Lessing, *Werke und Briefe* (Anm. 1), *Band 6: Minna von Barnhelm. Hamburgische Dramaturgie. Werke 1767-1769.* Hrsg. von Klaus Bohnen. 1985, S. 655.）という概念を考慮に入れながら、別稿で詳細に論じる予定である。
- 25 前掲拙著参照。
- 26 Vgl. Barner, *Vorurteil, Empire, Rettung* (Anm. 3), 69f.; Guthke, *Aufklärung in Preussen* (Anm. 3), S. 60f. ここからは、「ザクセン喜劇」の根底を支える調和的世界秩序に対する信頼を、もはや読みとることはできない。Vgl. Nisbet, *Lessing* (Anm. 7), 98f.
- 27 Lessing, *Werke und Briefe* (Anm. 1), *Bd. 3: Miss Sara Sampson. Briefwechsel über das Trauerspiel. Werke 1754-1757.* Hrsg. von Conrad Wiedemann unter Mitwirkung von Wilfried Barner und Jürgen Stenzel. 2003, S. 156f. Vgl. Barner, *Vorurteil, Empire, Rettung* (Anm. 3), 63f.
- 28 レッシングは思弁的体系に対する不信感を抱いていた、とニスベットはいう。Nisbet, *Lessing* (Anm. 7), S. 172f.
- 29 Michaelis: Rezension über die Juden. In: *Göttingische Anzeigen von Gelehrten Sachen*. Göttingen. Unter der Aufsicht der königl. Gesellschaft der Wissenschaften. 70. Stück. Den 13. Junius. 1754, S. 621f.
- 30 Vgl. Nisbet, *Lessing* (Anm. 7), S. 86.
- 31 Barner, *Vorurteil, Empire, Rettung* (Anm. 3), S. 70.
- 32 Vgl. Guthke, *Aufklärung in Preussen* (Anm. 3), S. 64f.
- 33 1754 年、レッシングはメンデルスゾーン (1729-86) の知己を得て、美德と教養を具えたユダヤ人の旅人が「絵空事」ではないという確信を強めた。このため、アーロン・グンベルツ (1723-69) ——ドイツのユダヤ人解放運動先駆者——宛のメンデルスゾーンの書簡を、この「反批判」に添付する。なお、メンデルスゾーンによれば、グンベルツこそ、「旅人」のモデルに似つかわしい。(495) Vgl. Nisbet, *Lessing* (Anm. 7), S. 95f.
- 34 Ursula Schulz: *Lessing auf der Bühne: Chronik der Theateraufführungen 1748-1789.* Bremen/Wolfenbüttel: Jacobi,

1977, S. 181f.

- 35 Der mißverständene Lessing. In: *Sulamith, eine Zeitschrift zur Beförderung der Kultur und Humanität unter der jüdischen Nation*. 1. Jahrgang. Hrsg. von D. Fränkel und Wolf. Leipzig: Reinicke, 1806, S.253. 啓蒙文学はユダヤ人解放に寄与したという通説について、当劇評を根拠にして疑問を呈するのが、右の論考である。Och, Lessings Lustspiel „Die Juden“ (Anm. 9), S. 42f.
- 36 佐藤研一「十八世紀ドイツの通俗劇に描かれる異邦人像——アウグスト・フォン・コッツェーを中心にして——」『国際文化研究科論集』第23号（2015年）、1-18頁参照。
- 37 若きレッシングは、自分の時代にふさわしい戯曲を模索する試行錯誤の途上にあつた。『ユダヤ人』は喜劇よりも、悲喜劇と呼ぶ方が適切とみる向きもあるかもしれない。しかし、肝心な点は、ジャンルの定義づけよりも、新しい戯曲を求めて揺れ動く若き作家のエネルギーを見定めることにある。前掲拙著、17-19頁参照。
- 38 グートウケによれば、『ユダヤ人』は社会的政治的観点から、『賢者ナータン』は宗教哲学的観点からユダヤ人問題と取り組む。Guthke, *Aufklärung in Preussen* (Anm. 3), S. 163.

Widmung: Diesen Aufsatz möchte ich meinem jüngst verstorbenen Freund Masahiro Konno (Tokyo) widmen, der mir ein geradliniger und kritischer Wegbegleiter war.